



オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～

夏号

2020 SUMMER

VOL.09

巻頭言

一般財団法人オレンジクロス事務局長
西山千秋

第6回 看護・介護エピソードコンテスト

選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評

地域包括ケアの取組み

新型コロナに想う

～メッセンジャーナースの挑戦～

在宅看護研究センターLLP代表
村松静子氏

緊急レポート

COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクト

～利用者を支えるチームへの感染防御資材供給を目指して～

COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクト 事務局
吉江悟氏



一般財団法人

オレンジクロス



巻頭言

在宅ケア今昔

今から35年位前、突然の業務命令で「ホームケア推進協会」（三菱グループ8社で構成する任意団体）へ出向し、(当時はまだ社会的には存在しなかった)在宅ケア（ホームケア）の事業化を試行する仕事を拝命しました。全くの新規事業という事で、どこから着手したら良いのか皆目見当が付きませんでした。

1980年代中頃（昭和60年前後）は、超高齢社会が到来することは行政はじめ民間企業も十二分に認識してはいたものの、特に民間企業は具体的に何を・どこから・どう手をつけていったら良いのか、どう関わっていけば良いのか、まだまだ手探りの状態でした。また当時は、高齢者問題は福祉の分野と捉えられており、民間企業が高齢者問題を手掛けることは、「福祉を食い物にするのか」と言われた時代でした。今とはまさに隔世の感があります。厚生省（当時）では、来るべき超高齢社会では積極的に民間企業の力を活用していかなければならないとの考えのもと、「民活」という概念を生み出し「シルバーサービス振興指導室」という部署が設置されました（初代室長は辻哲夫氏<東京大学 高齢社会総合研究機構未来ビジョン研究センター 客員研究員、弊財団理事>です）。

「在宅ケア」推進のためには、自宅で療養する方々に対して医師や看護師と共に、介護・生活介助を専門に行う人材の育成が不可欠との結論に至り、介護人材の育成を柱に考えることとなりました。ところが当時はまだ、そのような人材を専門に育成する機関は見当たりませんでした。丁度その頃、新宿にて有限会社で訪問看護事業を立ち上げた先駆的な看護師がおられました。その方も、「在宅ケア」を広げていくには、医師や訪問看護師だけではなく訪問看護師と共に介護・生活支援を専門に行う介護ヘルパーが不可欠という考えをお持ちでした。そこで、その方に介護ヘルパーの教育をお願いしました。3ヶ月の教育プログラムを設け、10数人を介護ヘルパーとして養成しました。その方が、今回本号で特別寄稿いただいています村松静子氏（在宅看護研究センターLLP代表）です。その後、社会環境を勘案しつつ、実際に在宅に介護ヘルパーを派遣する事業を試行しました。ただ当時は派遣業では難しいという事で、厚生省（当時）の指導のもと請負で業務を開始したこと、また初月売上げが5万円だったことを今でも鮮明に覚えています。

その後の、関係者各位の大変なご尽力による我が国における「在宅ケア」の発展・充実は、今われわれが実感している通りです。

2020年の今、時代は大きく変わり、コロナと共生する時代となりました。人と人との触れ合いの中でこそこの「在宅ケア」を、これからどういう形で展開していくのか。「在宅ケア」も次のステップを模索する時期に差し掛かってきていることを痛感しています。広く「地域包括ケアシステムの構築に資する」ことを事業目的としている弊財団としても、その一助を担えればと、心を新たにしているところです。

一般財団法人オレンジクロス事務局長

西山 千秋

第6回 看護・介護エピソードコンテスト 選考結果

当財団では、「看護・介護エピソードコンテスト」を通じて看護・介護エピソードを広く募集し、看護・介護のすばらしさを、みなさまと共有したいと考えております。第6回の選考結果と受賞作品をご紹介します。

大賞	この世界は儂い、だから美しい	中島 圭佑 さん (介護福祉士、ケアマネジャー)
優秀賞	ONE TEAM	佐々木 良子 さん (宅建士)
優秀賞	諦めなくて良かった	JONI PALSON さん (介護福祉士)
優秀賞	ああいう人になりいさん	杉山 和香子 さん (看護師)
選考委員特別賞	おばあちゃんありがとう	飛川 希 さん (中学生)
選考委員特別賞	ダブルケアの極意	見澤 富子 さん (主婦)

第6回 看護・介護
エピソードコンテスト
大賞作品

この世界は儂い、だから美しい

中島 圭佑さん

あなたが天国に旅立って7年が経ったね。あなたの思いは今も私の中で生き続けているよ。あなたと一緒に見た世界は儂いかもしれないけど、美しかった。その世界で生きる意味を見出したあなたはとても美しかった。今でもあなたの優しさに包まれて、私は前を向いて介護の仕事をしているよ。

あなたとの出会いは介護の仕事始めて間もない頃。あなたは入院先の病院から私の働く施設にやってきた。無表情で玄関から入ってくるあなたを明るい挨拶で迎え入

れた。あなたは「挨拶なんてしなくていい。私は死にたいだけ。」と言って目を閉じた。私は言葉が出なかった。両親を早くに亡くし、若くして癌を発症、二度克服したが、医師から回復の見込みがないと宣告され、最期の住まいとして施設に入居を決めたそうだ。

入居後もあなたは常に暗い表情で毎日を過ごしていた。食事もほぼ摂らず、声掛けにも答えることがない為、ベテランの介護士ですら悩んでしまう程だった。当時、私は未熟な介護士で、生活の基本となる食、排泄、入浴の事

ばかり考え、介助を頑なに拒むあなたに対してどう接して良いか分からなかった。そんな時、上司から「私たちの仕事は介助だけではない。介護が必要な人と捉えるのではなく、内面を大切にしてください。」と助言を受けた。その言葉を考えながら、信頼を得られるように毎日返答がなくても声掛けを続けた。しかし、内容はひどく独りよがりなもので、自分の事ばかり話していた。

ある日私が独り言のように料理で失敗した話をしていると、あなたが突然笑い、「分かった。もう観念よ。毎日話してくれてありがとう。面白くないけど。」と言った。私は突然話し出したあなたを二度見した上でフリーズしてしまった。その姿を見たあなたは大笑いしていた。

その後、あなたは「一つだけ質問して良い？」と言った。私が頷くと、悲しそうな顔で話し始めた。「ねえ、理由がなくちゃ生きてはいけないの？私は病気になるまで楽しい事を後回しにして働いてきた。突然癌になって辛い治療を繰り返して結局助からない。私の生きる意味は何なの？普通の幸せが私には分からない。」と。私は言葉を探したが、結局見つからず「分かりません。でも私にできることはないですか？」と返した。あなたは笑いながら「馬鹿正直ね。うーん、それなら世界旅行に行きたい！」と想像を上回る要望を言ってきた。私は困惑したが「分かりました。」と答えていた。あなたは驚いた表情で「お手並み拝見ね。」と言った。

私は考えた。本当に旅行に行く事は困難であり、他の方法を考えるしかなかった。しかし、私に心を開いてくれた事に応えたかった。そして思いついたのがボイスレコーダーだ。私は元々動画の編集が得意な為、世界の観光地の画像に合わせて音楽を流し、実際に旅をしている様な雰囲気でもナレーションをつけていった。第一作目のアメリカ編を完成させてあなたの部屋に向かった。

私が唐突に「今からアメリカに行きますよ！」と声をかけると、あなたは「何を言ってるの？」と戸惑った。私は聞こえていないふりをして、急いで準備を始めた。部屋を暗くし、タブレットを渡して、「準備はいいですか？」と声を掛け、再生ボタンを押した。空港の画像で「出発！楽しみだなあ。機内に乗り込もう。」とナレーションを流す所から始め、アメリカに着いて自由の女神等を観光し、ロックな音楽をバックにハンバーガーを食べる様子を主

観的に表現した。クオリティは微妙だったが、あなたの目は輝いていた。見終わるとあなたは「ありがとう。本当に旅行している気分だったわ。」と涙を流していた。それから私は世界各国の動画を作りあなたとの時間を過ごした。それが功を奏したのか、あなたは笑顔で過ごす時間が増え、徐々に食事も摂り、他の介護士とも話をするようになった。

そして私に「生きたい。少しでも長くこの世界で。」と言った。

それから半年。癌の進行には勝てず、急激に体調が悪化した。癌性の疼痛が全身に及んでいた。鎮痛剤を使用している為、一日の大半を寝て過ごす様になった。私自身もあなたの姿を見る事が辛かった。そんなある日、あなたは「ねえ、私もうだめかも。最後のお願ひ。ふるさどが見たい。」と言った。私は頷き、すぐに準備を始めた。

私は上司に事情を説明し、2日間の有休を取りあなたのふるさどに向かった。最後の動画になるかもしれない。だから、心を込めて作りたいという気持ちだけが私を突き動かしていた。ふるさとの風景、母校、近所の商店、それらを撮影し、あえてナレーションは入れなかった。唯一の音源は小学校にお願いして校歌を録音させてもらった。協力をお願いすると音楽の先生が快くピアノを弾いてくれた。

数日後、完成した動画を見ながら一緒に過ごした。あなたはずっと涙を流し震えながら見ていた。私はそっと手を握り、何も言わずに寄り添った。

見終わるとあなたは「私が聞いた質問覚えてる？答えはあなたが教えてくれたわ。生きる事に理由はいらない。あなたに会えて幸せだった。毎日が輝いていた。明日を待つことは試練だと思っていたけど、違う。明日を待つことは希望なの。どんな楽しいことが待っているのかなって。私の分も幸せになってね、あなたの純粋な心は沢山の人の心を満たすのよ。本当は死ぬのが怖かった。でも、今はあなたのせいで生きてたくて仕方がないじゃない。ありがとう。」と言った。私は涙が止まらなかった。あなたは私の手を握った。

数週間後あなたは天国に旅立った。私はあなたに手を

添え、泣いた。

生きる事の意味を教えて貰ったのは私かもしれない。

なぜここまでやるのかと聞かれた事もある。介護はも

： ちろん技術、知識も必要だ。しかし、私は「生きる」を支える手助けをしたい。命や一日の価値は皆一緒だから。介護士の仕事は無限の可能性を秘めている。だから私は、時間が許す限り必要としてくれる人と共に生きたい。

大賞

「この世界は儂い、だから美しい」

中島 圭佑さん



この度は、大変名誉な賞をいただき、誠にありがとうございます。審査員の皆様、関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。

このエピソードは私の大切な思い出であり、今の

自分を作ってくれた大切な記憶です。未熟であった私に、「生きるとは何か」を教えてくれた事に今でも感謝の気持ちを忘れた事はありません。

私は、よく同僚に奇想天外な事をやり過ぎだと言われます。私にとって最高の褒め言葉です。高齢者だから穏やかにという観点も必要かもしれません。しかし、同じ一日を過ごすなら「今日が人生で一番幸せな日」にできる様に支えたいと思っています。人は笑顔と涙の数だけ幸せになるきっかけを得られると思います。だから、私はこれからも多くの人と真剣に向き合い、幸せ作りのお手伝いをしたいと思います。今を生きる瞬間を共にできる事を幸せに思いながら。

最後に、新型コロナウイルスが終息しない中、医療関係者、介護従事者の方々は大変な数か月間であったと思います。その中でも私を支えてくれたのは施設の入居者様と一緒に働く仲間です。互いに励まし合い、支え合う中でさらに強い絆を生みました。今回の受賞も心から喜んでくれています。本当にありがとうございます。

優秀賞
作品

ONE TEAM

佐々木 良子さん

不慮の事故で全身麻痺となり十五年が過ぎた。幼かった息子たちは、それぞれ大学生、高校生へと成長した。

当時、全身麻痺に加え、シングルマザーとなった私が子育てをするなど、とうてい不可能だと猛反対を受けた。常識で考えたら当たり前だ。無理、無謀、無茶だ。まさにその通りだった。けれども、諦めたら息子たちと離ればなれになってしまう。一歩も引くわけにはいかない。借りられる“手”はすべて借りて、ただひたすら息子たちと生

： きることに全力を注いだ。私は一人ではなかった。主治医の先生にリハビリの先生、訪問看護師さんに弁護士さん、たくさんのヘルパーさんのおかげで、「五年、生きられたら」と言われた余命の壁を乗り越えることができた。

そして今、向き合わなければならないのは、母親の介護である。“老老介護”が問題視されているが、私の場合は、“障老介護”とでも呼ぶべきだろうか。七十九歳になる母

は、自宅から歩いて三十分のところにて一人で暮らしている。

怪我をする以前、夫はうつ病を患っていた。通院やカウンセリングを受けながら一進一退の日々を過ごしていた。そんな夫が私の実家への引越しを口にしたのは、自然豊かな場所での子育てや、心機一転再スタートを切りたかったのかもしれない。とは言え、世間体を何より重んじる母に、うつ病が理解できると思えない。不安だった。そしてその不安は的中し、母は夫に「キチガイ」と罵るようになった。わかってもらおうと、何度も話し合ったが無駄だった。家族を守るために別居を決意した。苦渋の決断だった。

夫の病気や子育てに奔走するあまり、自身の体調を気遣う余裕がなく事故が起きた。一週間生死の境を彷徨ったのち、奇跡的に一命を取り留めるも、首から下の自由を失う全身麻痺となった。九カ月にも及ぶ辛い入院生活を終えて自宅に戻ると、夫から離婚を告げられた。追い打ちをかけるかのように、母は私に「こんな役立たずの身体になって」と言い放つ。神も仏もないとはまさにこのことである。

そして、車いすになった私を「ご近所さんに見られたらみっともない」を理由に、実家への立ち入りを十年の間拒んでいた。普通ならこれで縁も切れそうなものだが、孫にしてみれば、どんなおばあちゃんでもかけがえのないおばあちゃんなのだ。親の都合や感情を引きずるのは止めようと思った。

そんな母も、さすがに老いには敵わなかった。今から五年前、腰の手術を受けることになり、二週間ほど入院した。自由に動くことができない不自由さを目の当たりにして、

「今まで悪かったね。あんたはよく車いすで二人の子供を育ててきたね」と、つぶやくように言った。胸のつかえが軽くなった。実家への出入りも許された。それから退院後の生活に向けて、ケアマネジャーさんとの打ち合わせや、ヘルパーさんの手配、住宅改修など、急ピッチで話を進めていく。

経過も良好で無事退院となった。杖を使えば一人で歩けるまでに回復したので一安心。あとは、転んで骨折しないように過ごすことが大切だ。買い物や、おかずなどは息子たちと手分けをして運んだ。朝に晩にと安否確認の電話もかけた。ヘルパーさんは週二回入ってくれた。一番有り難かったのは、昔馴染みのご近所さんだ。何かにつけて気にかけてくれたおかげで本当に心強かった。

その後、脳出血や脳梗塞も発症したが、発見が早く大事に至らずに済んだ。後遺症が残らなかったのは不幸中の幸いである。

今は軽い認知症もあるが、一人で頑張って生活している。もちろん、ヘルパーさんの助けを借りながら、私たち家族総出で支えている。

私自身、たくさんの人に支えられながら生きてきた。毒舌を吐いていた母だって歳は取る。人は一人では生きていけない。大なり小なり支えあって生きているのだ。

介護に大切なのは「ONE TEAM」

家族、地域、社会が一つになってこそ乗り越えられる。そのことに感謝しながら、与えられた寿命を意義のあるものにしていきたいと思っている。

優秀賞

「ONE TEAM」 佐々木 良子さん

この度は、栄誉ある賞をいただきまして、ありがとうございます。

全身麻痺のシングルマザーになって15年。

幼かった息子たちも、高校生、大学生へと成長しました。私は一人ではありませんでした。タイトルにありますように「ONE TEAM」として、たくさんの方たちに支えられながら生きて参りました。数々の試練や困難に打ち勝つことができたの

も、「TEAM」あつてのことでした。そして今、向き合わなければならないのは母の介護です。私自身が介護を受ける身ではありますが、「考えること、伝えること、メモをとること」などなど、自分にできる最大限の努力をしながら、母にとっての「ONE TEAM」を作っていくつもりです。そしてこれからも、感謝の気持ちを左手のペンに託して綴っていかれたらと思います。



優秀賞
作品

諦めなくて良かった

JONI PALSON さん

夢を信じることは大切な事だと思います。高校一年生の時、初めて日本語を勉強し「ありがとう」という言葉を覚えました。授業中に先生が日本について色々な話を話してくれて日本が好きになり、日本へ行きたい夢が芽生え始めました。高校を卒業してから、少しでも他の人の役に立ちたかったので看護大学進学を親に相談してみました。学費があまりにも高く親の経済力では無理だったので、兄妹に反対されました。しかし、母が「いくら貧乏でも勉強は続けなさい」と応援してくれて大学に入学出来ました。お金に困っていたのにどうやって学費を工面してくれたのか、今でも不思議に思っています。

インドネシアでは毎週日曜日に日本のアニメが放送され、見るたびに日本の事が頭から離れず日本へ行きたい夢が膨らんでいきました。親元を離れ大学の長期休暇があっても帰省をせず、唯一の楽しみは買った本の日本語をひたすら覚えることでした。時々、「お前可笑しくない、お前は日本へ行ける訳ないでしょ」と友達にからかわれることがありましたが「いつかきっと夢は叶う」と信じていました。2011年、卒業論文を書いている時に東日本大震災のニュースを耳にしました。震災で何百人もの人が犠牲になったことを知り、涙が溢れました。

大学卒業後、都会で就職活動をしました。大学の成績の良し悪しは関係なく、病院内に親戚がいなければ仕事に就くことは難しい現実がありました。就職活動を諦めかけた頃、海外での看護師募集があることを知り色々調べました。

そして、インドネシア日本経済連携協定（EPA）というプログラムを知り、応募して合格することができました。2013年来日し大阪研修センターで日本語を勉強しました。日本の制度では病院で働くには二年以上の実習経験がなくてはなりません。私は条件に満たなかった為介護施設で働くことになりました。研修期間中に日本語能力試験2級を習得していたので苦労なく働けると思っていたのですが、実際に現場に入ってみたら専門用語が飛び交い、わか

らないことだらけで日々ストレスを抱えていました。そして、レビー小体型認知症、アルツハイマー型認知症等を抱える入居者様と初めて接して戸惑う毎日は、ストレスに追い打ちをかけました。ある日、80歳ぐらいの女性の入居者様の話し相手になりました。「お兄さんはどこから来たの」、「名前は何というの」、外国人の私に興味を示したようで普通の会話も弾んできたところ、返答が終わるや否や何度も同じ質問を繰り返され、戸惑ってしまいました。どうして良いか分からずその場所からすぐに逃げたいと思いましたが、親から「ほかの人に話している時は、つらい事があっても笑顔で」と教えてくれた事を思い出し、同じ質問にも「そうですね」と笑顔で答えることが出来ました。

月日が経ち、同僚のお陰で仕事にも少し慣れてきましたが排泄介助、食事介助等に最初は抵抗を感じた事もありました。特に排泄介助についてはインドネシアの病院で実習した時の主な仕事は採血や点滴で、検査以外の利用者の排泄物はそのご家族が処理してくれたので触れることは殆どありませんでした。この仕事は続けられないかもしれないと諦めかけた時、相談できる日本語の先生に悩みを全部打ち明けてみました。先生から「石の上にも3年」と言われました。どういうことかと調べてみたら「辛くても我慢してやり続ければいつかはきっと良い事になる」という意味でした。私は「折角日本に来たんだから取り敢えずやる！」と初心に戻ることにしました。

インドネシアでは日本とは違い、年老いた親の面倒を家族で見る習慣があります。この違いは何なのか気になり調べてみました。今の日本は高齢者人口が28.1%で成人人口の12.2%を大きく上回っている為、家族で面倒を見るのが難しいと分かってきました。

仕事を初めて2年経った頃、私は大きなショックを受けました。日本のテレビのニュースで朝から晩までISIS（イース）に関するニュースが取り上げられました。ISISを日本語に訳すとイスラム過激派組織です。そのこ

とが介護現場で働くイスラム教徒の私達にも大きな影響がありました。親しかった同僚や周りの人達の態度が変わり、「本当のイスラム教は違う、そうじゃない」と伝えたくても言葉の壁があり、直接偏見を感じていなかったのですが家で泣いていた日々でした。母に話してみたら「あなたの行いを見てイスラム教の教えが周りの人に伝わるから、今まで通り元気に笑顔で慈悲の心を持って働けばよい」と言われ、私は母のアドバイス通り一日5回のお祈りや断食をきちんと行いました。すると、これまでイスラム教に興味を持っていなかった周りの人達に「断食ってなんですか、なんでお祈りしなくちゃいけないの」と尋ねられるようになり、イスラム教についての理解を少しずつ得られるようになりました。

介護現場での仕事の内容は、朝起こしたり、食事介助をしたり、入浴手伝いをしたりと、毎日同じ事の繰り返し

として飽きるという声もあるかもしれませんが、しかし、そんな毎日の中で入居者様の小さな変化を感じられるのは家族でもなく、医療関係者でもなく、私達介護職員であると思っています。日々、入居者様との何気ない会話の中で「ありがとう」という言葉に喜びや仕事のやり甲斐が感じられます。自分の家族ではありませんが、一生懸命お世話をすることで心が通うことが素晴らしいところだと私は思います。国家試験に合格してから6年が経ち、勉強しなければならないことがまだ沢山ありますが、周りの人の支えで辛い事を乗り越えられた今だからこそ「あの日、あの時、諦めなくて良かった」と感じます。

そして、介護福祉士としてのプライドを持って、どこかで落ち込んでいる後輩達が元気になってくれるようエールを送りたいと思います。

優秀賞

「諦めなくて良かった」

JONI PALSON さん

この度は優秀賞をいただきまして誠にありがとうございます。この様な素晴らしいコンテストに参加させていただくのは初めてで、その上、賞を頂けるとは夢のようです。審査員のみなさま本当にありがとうございました。

来日して介護現場に携わって早くも6年が経ちました。最初の頃は言葉、日本人の働き方、ハウレンソウ等が理解できずに挫折した時に母の助言に力を貰い、介護現場では「ありがとう」という入居者様の暖かい感謝の気持ちを頂いて元気付けられていました。6年という

歳月は長いようですがまだまだ未熟なので、これからも入居者様に寄り添える介護福祉士になれるように頑張りたいと思います。

これまでの私が困難を乗り越えて諦めずにいられたのは、同僚、先生方、周りの方々のお陰です。この看護・介護エピソードコンテストを通して、介護の素晴らしさや外国人視点からの介護とは何かを知って頂き、少しでも介護に携わる方にお役に立てれば嬉しいです。

優秀賞
作品

ああいう人になりいさん

杉山 和香子さん

5歳の私は祖母の病院受診についていくのが楽しみだった。それは、かき氷。祖母が帰りに立ち寄る甘味処でごちそうしてもらえらるからだった。瀬戸内海沿いの小さな町の市民病院で薬を待っているとき、大勢の人が行き交

う広い待合ロビーの長椅子に近寄ってきた一人の看護婦さんが「青木さん、元気？」祖母にそう声をかけた。それまでうつむいて目をつぶり眉間にしわを寄せていた祖母がパッと笑顔になり、その人と二言三言、言葉を交わ

した。その看護婦さんの後姿を見ながら、「ああいう人になりいさん」と祖母は私に言った。

パーキンソン病から肺炎を起こし、祖母は他界した。祖母の遺した言葉は私を看護の道へと導いた。「ああいう人になりいさん」その言葉はあの時の祖母の笑顔と共に私の胸に何度もよみがえり、あの時の看護婦さんの声、笑顔、たたずまいを思い出し、追いかけた。

若いナースの私は心筋梗塞の患者が救急車で運ばれて来るCCUで働いた。集中治療から心臓リハビリを経て、生活指導をし、退院する患者を何人も見送った。退院するときの患者さんはみな笑顔だった。「ああいう人」になれた気になっていた私は、ある日気づいた。笑顔で退院する人たちの背中に不安が宿っていることを。そして「この人は言っても聞かないのよ」という家族の言葉は不安の裏返しだということ。案の定、その人は再び運ばれて来るのだった。病院だけではダメだ、その人の生活が見える場所ですと寄り添える看護を目指したい。漠然とそう思っていた。

13年間も専業主婦をしている間に介護保険制度ができ、ケアマネジャーという職業が誕生した。「これは私のやる仕事だ」迷わずケアマネの世界に飛び込んだ。急に歩けなくなって困っている人、親の物忘れが心配な人、病後の療養生活に不安がある人、末期の在宅療養を希望する人、様々な人の人間模様に振り回されながら必死で仕事をした。48歳でお亡くなりになった肝臓がんのSさんは看護師の資格のあるケアマネを希望され、私が担当した。何かと頼りにしてくださり、「あなたが来ると心にほっこりと火が灯ったよう」と、あの時の祖母のような笑顔を見せてくれた。しかし、癌の末期は駆け足でやってきた。Sさんとは2か月足らずでお別れだった。看取りに近づくとケアマネができることは少なくなり、お亡くなりのおと無力感を感じた。

ケアマネ6年目の春、会社から「訪問看護ステーション立ち上げチーム」の一員に任命された。たくさんの人に支えられて、訪問看護師として再びナースの仕事をさせてもらえる幸運に恵まれた。入浴介助やリハビリ、服薬管理、療養相談、意外に多い排便介助、そしてお看取り。ありったけの知識と技術でケアを提供し、「ああいう人」に今度こそ近づけるかもと、訪看に没頭し、毎日があっという間に過ぎていった。CCUにいた頃の理想だった「そ

の人の生活が見える場所ですと寄り添える看護」が実践できる幸せをかみしめられるはずだった。確かに訪問先ではたくさんの笑顔に出会える。でも訪看をやればやるほど「訪看」だけではその人の生活を支えられないことがわかり、その人の心にずっと火を灯し続けるにはたくさんの部門で「ああいう人」が必要なのだと思い始めた。

訪看5年目の秋、今度は会社が市から地域包括支援センターを受託することとなり、配属された。慣れない行政の会議や事業に「ああいう人」を目指している自分を見失いそうだった。包括に相談に来る人はみな、両手に悩みをいっぱい抱えてやってくる。ちょっとやそつとではその人を笑顔にすることができない。せいぜい、くすくす笑わせることができる程度。でも、その方の自宅を訪問し、その人の生活の細かな様子を見ると、その方の心配や困難の原因が徐々に明らかになる。そして分かったのは、本当の意味で、その人が笑顔になれるのは、人から何かをしてもらった時よりも、「自分で自分の明日を考え、自分でなんとかできるようになった時」だということ。88歳女性のMさんは、久しぶりに訪ねてくる娘に手料理をふるまいたかった。でも、最近膝が痛くてスーパーまで買い物に行けない。「もうダメだね…」嘆くMさんのために民生委員さんの協力を得て、移動スーパーの利用を持ちかけた。歩行器をレンタルし、なんとか300m歩けるよう訓練し、初めてのお買い物に付き添った。「わあ！切干大根も売ってる！これ娘の好物なんだわ」と目を輝かせるMさん。一緒に買い物していたご近所さんが、「そんなに買ったって帰るのが大変だがね。うちまで持って行ってあげようか？」「このカゴ使う？」久しぶりに外に出てきたMさんに次々声がかかる。「おばあちゃん！ああいう人がたくさんいたよ！！」私は心の中で思った。そうなのだ。自分一人で「ああいう人」を目指すのではなく、もともと地域にいるたくさんの方の「ああいう人」を探して手をつなげばいいんだ。「ああいう人」には誰でもなれる。それを伝えることがこれからの私の仕事だ。

人類が新型コロナウイルスに打ち勝った日から、スタートしよう。

みなさーん！ほんの一瞬、誰かに声をかける事から始めませんか？

優秀賞

「ああいう人になりいさん」

杉山 和香子さん

ステイホームの中で、何か建設的な事をしたいと思いコンテストに応募しました。

ゆったりとした時間の中で、原点である祖母の言葉を思い出しながら、自分の看護師人生を「ギュッ」と手のひらサイズに収めることができ、幸せな時間を過ごすことができました。「地域の人たちがうまく交流できるしくみ」を考えるのが地域包括支援センターの仕事なのですが、コロナ自粛で今まで積み上げたものが振り出しに戻された感があります。人と繋がりたいのに交流できない

もどかしさにもがきながら、それでも、こんな世の中でも何かいいことがあると信じなきゃ、と思っていた時、受賞の知らせをいただき、元気とパワーをもらいました。祖母もきっと、「そねえに立派な賞をもらうたんかね」と喜んでくれたと思います。コロナの影響で世の中がどんなに変わろうとも、人の心を動かせるのは人の心であり、その心を作る笑顔と言葉であると感じ、この先も「ああいう人」集めに精進します！ありがとうございました。

選考委員
特別賞
作品

おばあちゃんありがとう

飛川 希さん

祖母がうちに来ることになったのは七年前のことです。僕が小学校一年生、兄は四年生、妹は四才でした。

祖母はうちに来る前、埼玉県に祖父と二人で暮らしていましたが、祖母のパーキンソン病が進み、介護していかなければならないので、うちに来ることになりました。僕が幼稚園生の頃の祖母は優しいイメージだったので、一緒に暮らせることをとても楽しみにしていました。

ですが、うちにやって来た祖母はその優しい祖母とは違っていました。病気が進んだことにくわえて、新しい環境に慣れないのか、幻覚が沢山見えるようになり、しょっちゅう怒ったり、泣いたりしていました。そのため祖母が兄や妹を泣かせてしまうことも少なくありませんでした。僕はそんな祖母の姿に、戸惑っていました。祖父はいつも「病気だから仕方ない」と言うのに対し、妹は「病気だったら何でもしていいのか」とよくもていたのを覚えています。

そんな日が続き、僕は仕方ないものだと思うようになっ

ていきました。その頃はまだ、祖母はぎりぎり立ったり歩いたりできていましたが、ついには転んでしまい、車椅子生活となってしまいました。

その後、祖父はケアマネジャーの方と相談を重ね、「祖母をデイサービスに行かせる」ということに決めました。最初はとても嫌がっていたデイサービスも日を重ねることに祖母の楽しみのようなものになっていき、デイサービスに行きはじめたことによって、顔も心も昔のように優しくなっているような気がしました。

ぼくはその頃、祖母の『存在』というものに気づき始めていました。いつもはいるはずの祖母が小学校から帰ってくると、「デイサービスに行っているからいない」ということに少し変な気持ちがありました。また、施設でのお泊りも始まり、会えない時間が増えました。わがままだった祖母がいらないのに、とても寂しく感じました。ぼくは「自分はこのままでいいのか・自分に何かできることはないのか」と考えることが増えるようになりました。

ちょうどその頃、祖母に合った薬が見つかり、僕らと徐々に会話ができるようになっていきました。それが僕はとても嬉しく感じました。祖母にもそれが伝わったのかよく笑うようになりました。僕にはその時、分かったような気がしました。僕は祖母のそばにいて、話したり笑ったりしてればいいんだ、ということです。その頃から祖母と接する量は増えていきました。昔の怒っている祖母の姿はもう、頭から消えていました。

僕は大きくなり、『介護』というものをよく理解できる

ようになりました。最初は祖父が介護しているところをただ見ているだけでしたが、今では僕も祖母の介護を手伝うようになりました。今はもう祖母の病気の悪化は止まり、元気に過ごしています。祖父は祖母がとても元気になったのは、孫の僕らのおかげだとよく言ってくれます。祖母のおかげで、将来は介護関係の仕事もいいなと思いはじめました。そんな色々な経験や思いをさせてくれた祖母に、心から「ありがとう」という感謝の気持ちでいっぱいです。

選考委員
特別賞

「おばあちゃんありがとう」 飛川 希さん

この度は、選考委員特別賞という賞をいただけて本当に嬉しいです。

祖母に結果を伝えると小さくうなずいていました。まさか自分が主人公の作文だとは思ってないと思います（笑）。

このように祖母と過ごした時間を「作文」というもので振り返る機会を与えてくださり、ありがとうございました。

実は僕は「介護」という感覚ではなく、「祖母と

過ごす時間」として日々暮らしているような気がします。なので、僕は「介護がキツイなあ」とか、「やだなあ」と思うことは全くありません。むしろ祖母と一緒にいられて、とても嬉しいです。大好きな祖母に長生きしてほしいと思っています。

この作文を書いたことによって、介護ということについて意識して考えるようになりました。本当にありがとうございました。



選考委員
特別賞
作品

ダブルケアの極意

見澤 富子さん

昨年、第一子が誕生した。しかしやっと授かったわが子ではあったが、正直喜んでもらえなかった。なぜなら私には育児を頼る相手がいなかったから。主人は海外赴任で日本におらず、母は父の介護でそれどころではなかった。実を言うと父は53歳から脳出血が原因による脳血管性認知症を患っている。だから息子が生まれた日も「父さんがデイサービスに行ってから病院に行く」と言っていて母はすぐに病院に来ることができず、やっと来たと思えば「もうすぐ父さんがデイサービスから帰ってくる」と飛ぶように帰って行った。これ以上母に迷惑をかける

わけにいかない。そう思った私はすぐに自宅に戻ろうと決意。しかし産後の肥立ちが悪く、結局里帰りをする事になってしまった。

「お母さん、ごめん。元気になったらすぐに帰るから」私がそう言うと「いいから、いいから」と母は笑った。しかし私に用意された部屋。それは庭の離れだった。おそらく父のことで迷惑をかけまいという母なりの気遣いなのだろう。久しぶりに会った父に以前のような穏やかな姿はなかった。

「殺すぞ！ さっさと飯作れ！」

昼夜問わず外にまで聞こえる罵声。テーブルを叩く音に「やめてください」という母の悲鳴が重なる。もう直視できない。たまたま私は父を止めに母屋に入った。しかし父は「うるせえ」と私を突き飛ばし、母まで「こっちのことは構わないで」と追い返した。私はそんな両親の姿に少しずつ、しかし確実に、心が離れていった。

しかし里帰りをして一ヶ月後のことだった。母が買い物中のスーパーで倒れ、救急搬送された。診断は脳硬塞。一命は取り留めたものの、医師からは後遺症が残ると言われた。私は母に対して何と声をかけていいかわからなかった。ただ悩んでもいられず、母屋に移り父の介護をすることにした。しかしそれは大変なものであるとはなかった。とにかく朝から機嫌が悪い父。せっかく作った食事にも気に食わなければテーブルにぶちまけ、「こんなもの食えるか」と怒鳴り散らす。内服薬を出せば「いらぬ、うるせえ、殺せ」と大声を浴びせ、コップの水をかけられることもあった。一日に何度も行くトイレ。「お父さん、ごめんね。こっちは終わったら行くから」と言っても「なんじゃ、こら。もっかい殴られたいんか」と言って腕をつかむ。気づけばその腕は蕁麻疹が出て腫れあがっていた。父はそんなものに気づくはずもなく私をトイレに引っ張った。もうボロボロだった。いつだって父と息子が寝たあとソファになだれ込んだ。

しかし介護の限界はやって来た。ある夜授乳をしていると一階から「おい、便所」と父の声がした。

「ごめん。これ、終わったら行くから」

だけど父が聞き入れるはずもなく階段を上ってくる。いつもならそこで私は手を止めた。しかしその時はできなかった。足音が近づくなり、怖くなり、思わず部屋に鍵をかけた。

「おらあ、殺されたいのか！ おい、殺すぞ」

ドアの前で激昂する父。ドアを叩く音は強く、その強さが私を恐怖に陥れる。しかしその恐怖さえ次第に憎しみや殺意にまで変わろうとするのを感じた。まずい。私はたまたま警察に電話をした。「もう父のことを殺してしまいそうです」

まもなく警察が到着し、父をなだめて寝室に連れて行った。あれだけ激昂していた父も警察官を見るなり穏やかになった。その様子を見るなり安堵し、なぜだろう、涙

が止まらなくなった。

警察官は言った。

「あなたは悪くない。介護はひとりじゃ解決できませんよ」そう言いながら「あした相談に行きましょう」と背中をさすってくれた。あなたは悪くない。その言葉にどんなに救われたことか。本当は助けてほしかった。手を貸してほしかった。だけど言えなかった。少しでも「助けて」って言えたら。たまには「できない」って言えたら。きっと、母だって、今ごろ。

まもなく母は退院し、リハビリ生活となった。後遺症で右半分が動かしにくく、歩行器や車椅子が必須である。日中はヘルパーさんを頼みながら、私も介護にあたっている。苦渋の決断ではあるが父は特別養護老人ホームに入所することになった。入所して早二ヶ月。最初は嫌がっていた父も徐々に慣れ、デイの時には参加しなかった体操にも精を出している。午前中に顔を出すと「よく来たなあ」と『おじいちゃん』の表情を見せる。職員さんの前では内服薬もちゃんと飲み、お礼も言う。なんだか嬉しいような、ちょっと悔しいような。でも今の父は前よりずっと笑顔が多い。

現在日本におけるダブルケア人口はおよそ二十五万人と言われている。高齢化や晩婚化により、年々その数は上昇している。一方誰かを頼ったり、頼ることすら引け目を感じている人もいる。「親だから」「家族だから」だけどそれは介護の正解ではないと思う。百点じゃなくても、百パーセント担えなくても、一日のどこかで自分も相手も笑顔になれば、それが正解。介護はしんどいし、ぶつかることだってある。だけど互いに肩の力を抜けたら時計の針は戻せないけれど、これまでとは違う瞬間（とき）を刻めるはず。今はそんな風に思う。

この場を借りて介護に関わるすべての人に伝えたい。どうか休んで。どうか寄りかかって。ソファなんかじゃなくて。

あなたを想うその人に。

選考委員
特別賞

「ダブルケアの極意」

見澤 富子さん

この度は大変素晴らしい賞をいただきありがとうございました。今も両親を介護しながら時に笑い、時に涙する日々です。自分を育ててくれた感謝は変わらないものの、日々変わってゆく両親の姿に自分の心が折れかかることもあります。

今年はコロナウイルスの蔓延により、デイサービスや保育園の利用も一時自粛となりました。周りに助けを求めるにもできない状況でした。それでも人間は素晴らしいですね。わざわざ電話をかけてくれる友人や遠くの親戚にはだいたい助けられ

ました。一人でやっても一人じゃないと思えました。

「介護をされていてよかったことはありますか」と聞かれても正直「はい」とは言えません。できれば両親にはいつまでも元気で好きなことをして欲しかったし、子どもにだってもう少しゆとりを持って接したかった。悪かったな。悪いことしちゃったな。今は両親にも子どもにもそう思います。だけど楽しそうな家族の表情を見て、少しホッとする自分がいます。ちょっと辛いけど幸せ。そんな風に思えるのはやはり周りの人のおかげです。

これからも感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思います。



川名選考委員長よりコンテスト全体の講評

今回のコンテストには、全国から140件以上の応募があり、過去最高を更新しました。最終審査に残った30作品は、外国人介護福祉士、障害者福祉の現場や、障害当事者からの作品もありこれまで以上に多様で、選考委員会も意見が割れ、かつてない白熱した議論となりました。

大賞の「この世界は儂い、だから美しい」は、看護師である秋山委員、医師である溝尾委員が揃って高得点をつけた作品です。思いの溢れたかかわりで心が開き、そのことで仕事としてのやりがいも得られる。「王道」といえる構成ですが、伝わるように書くのは案外難しいものです。現場にある普遍的に大切なものが説得力を持って描けていると評価しました。

今日的テーマで印象に残ったのは優秀賞の「諦めなくて良かった」。経済連携協定（EPA）で来日し、見事、国家試験に合格したインドネシアの方の作品です。日々の素直な思いがわかるのも作文ならではの。政府は、外国人の受け入れ拡大を急いできましたが、故国を離れてくる彼らの事情や思いを社会で受け止められるようにする作業が必要ではないかと感じました。「ああいう人になりいさん」は、祖母の残した言葉を軸に、看護師としての仕事を振り返る凝った構成です。夢を持って始めたケアマネー一期生から後進へのメッセージとして読みました。「ONE TEAM」は、重い障害を持ちながら子供を育てあげたシングルマザーの作品。「みんなで乗り切ればいいのよ」という結論の明るさに驚きました。

選考委員特別賞の「ダブルケアの極意」はこれからへの問題提起として選びました。「おばあちゃんありがとう」はうちの子だったらと思った方も多いのでは。この年らしい素直な視線の中に、確かな分析があって将来が楽しみです。今回、入賞作品6作品のうち、3作品までが、介護・看護職員の作品となりましたが、リアリティ、迫力では、介護に直面する当事者からの作品に軍配があがります。

来年もたくさんの挑戦をお待ちしております。

第7回
エピソードコンテストのご案内伝えたい！
わたしの看護・介護
エピソード

- 募集期間 2021年2月1日～2021年5月7日（予定）
 - 応募字数・書式 400字以上2400字以内、A4横書
 - テーマ 「伝えたい！わたしの看護・介護エピソード」
*看護・介護でのエピソードをお寄せください。
 - 応募資格 日本国内で看護・介護に携わっている方（個人・団体は問いません）
 - 賞（副賞） 大賞：1編（30万円）、優秀賞：3編（各10万円）
- 詳しくは当財団ホームページをご確認ください。<https://www.orangeccross.or.jp>

地域包括ケアの取組み

在宅看護研究センター
LLP

東京都

新型コロナに想う ～メッセンジャーナースの挑戦～



在宅看護研究センターLLP代表
村松静子 さん



村松静子

在宅看護研究センターLLP代表／日本在宅看護システム社・看護コンサルタント社 代表取締役

1947年、秋田県生まれ。筑波大学大学院教育研究科修士課程カウンセリング専攻修了。日本赤十字社医療センターICU初代看護師長。1983年、課外で訪問看護ボランティアを開始。1986年3月、看護の実践と理論の融合をめざすナース集団「在宅看護研究センター」を設立し、老人訪問看護ステーション創始のモデルとなる。

2010年、メッセンジャーナース認定協会を立ち上げ。2011年、「開業ナース」としての活動が認められ、赤十字国際委員会より「フローレンス・ナイチンゲール記章」を受章。

【著書】

『「自主逝」のすすめ～あなたの最期はあなたが決める』（海竜社）、『メッセンジャーナース』（看護の科学社）、『おひとりさまの大往生ガイド BOOK』『家族を家で看取る本』『11人の看護師が伝える、おだやかに逝くヒント』（監修/主婦の友社）ほか、著書、監修多数

わが国では、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けられるよう、各地域がその特性に応じて、住まい・医療・介護・予防・生活支援の一体的な体制の実現化をめざしていくことを推進しています。ここ数年は介護予防に重点が置かれ、生活環境の調整に止まらず、生きがいや役割をもって生活できるような居場所づくりや高齢者の役割などの自立支援策に取り組んでいるところです。高齢者世帯の増加は止まることを知らず、独居高齢者も増え続けています。高度医療が高齢者の身にも押し寄せ、さらには「介護・看病疲れ」による自殺者が過去最多を記録していることも見過ごせない事実です。

そんななかでの新型コロナウイルスの発生・蔓延、世界中の人々が脅威にさらされ、米ジョンズ・ホプキンス大の集計によると、4月24日の時点での感染者は270万人、死者も19万人を超え、さらに続出しております。医療崩壊・地域崩壊も叫ばれ、イタリアでは、軽症者を自宅療養させ、地元のかかりつけ医が治療する方針をとったことから家庭内感染が広が

り、医師や看護師の感染が急増して、早々に地域医療が破綻したと報じられました。わが国でも4月7日には、新型コロナウイルス対応の特別措置法に基づく緊急事態宣言が7都府県を対象に出されましたが、16日にはその対象が全国に拡大されました。医療現場はすでに危機的な状況に陥っており時間の猶予はありません。国民一人ひとりが「自分事」として、ウイルス感染のリスクが身の回りに近づいていることを認識し、警戒感を抱くことが課されています。

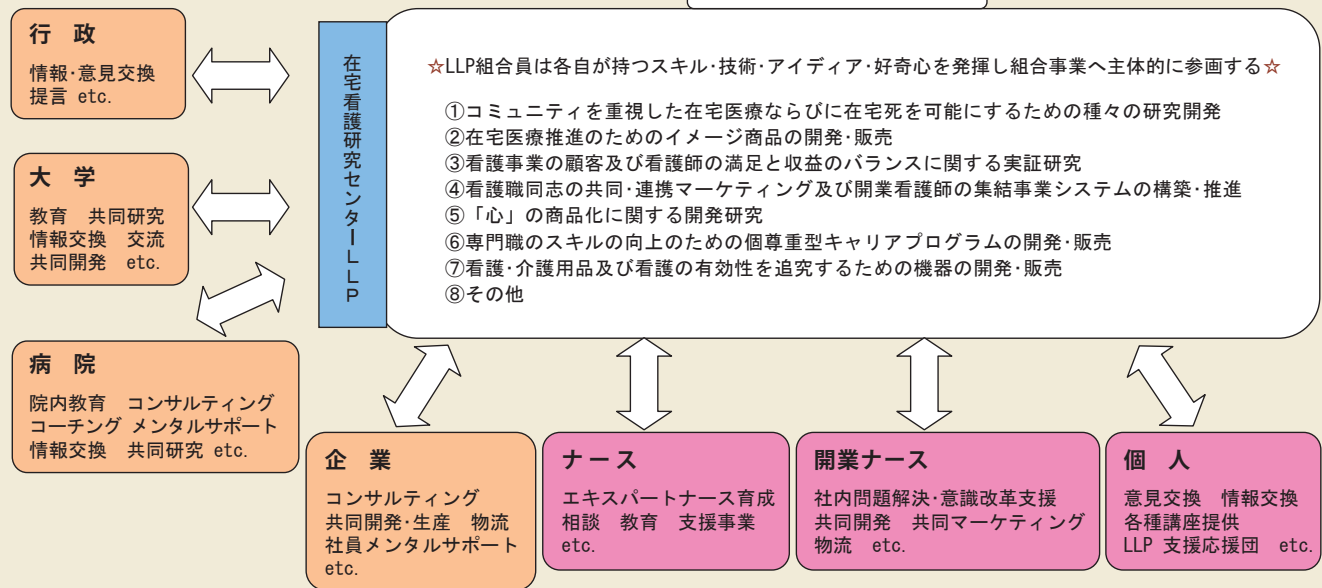
そこに飛んできた1通のメール「このコロナ騒動で北海道緊急事態宣言で帰省控え、グループホームも面会制限になって会えなくなっている間に、父が容態思わしくなく、勤務先はなんとかするからお父さんファーストでと言ってくれ、夫も息子もなんとかすると後押ししてくれ、金曜日から長期介護休暇となりました。面会制限のため、織姫彦星の両親をあわせるため、センターから学んだことを駆使して、「そのときは家で」なんとか叶えられたらと思い、動いています。なんとかおだやかな日常の時間作れるようにと願っております。お伝えしたくなってメールしました」。

新型コロナウイルスは猛威を振り続け、事態は刻々と変化しております。終息の見通しが全く立たず、長期戦の様相を呈してきました。オランダ国王はテレビを介して国民に向け「降ってわいたようなこの困難な時期を、一致団結して乗り越えよう」と訴えると同時に、全国の医療従事者、各種公共交通機関で働く人びと、そして一般労働者たちに心からの感謝を伝えています。国王は、この新型コロナウイルスを、「孤独（を生む）ウイルス」と呼び、高齢者や疾患を持つ人びとは今、予防のためとはいえ、家族や友人・知人との接触を制限されているため、精神的に孤独感を増大させるウイルスでも

在宅看護研究センターLLPの全体像

ICUで救命された女性の家族の要請により、ボランティアで始まった訪問看護は、作家・故遠藤周作氏の後押しを受け、有限会社・在宅看護研究センターとして昭和61年3月設立された。平成元年には創業者の本来の思いに近づくために理事会を結成、任意団体に組織替えをし、その活動は平成4年の新ゴールドプランで策定された老人訪問看護事業のモデルにもなった。しかし、事業の認可は公益法人のみのため訪問看護ステーションの指定は受けられず、同年、収益部門を株式会社に、又、平成7年には看護コンサルタント株式会社を設立した。その後、民間機関にも医療保険の適用が認められ2つの訪問看護ステーションを設置し、在宅看護研究センターは2つの会社の総称としてうたわれてきた。が、「日本社会に密着した専門的な看護を広く提供できるようになるために」という当初の趣旨を鑑み、平成17年に新会社制度として誕生した有限責任事業組合（LLP）にその姿を替えて、社会に位置付き、時代に即した在宅ケアシステムの構築をめざし、更なる挑戦、共同研究開発に取り組んでいる。

事業目的



在宅看護研究センター有限責任事業組合 : 〒169-0075 新宿区高田馬場4-9-11 TEL03-5386-6058 <http://www.nursejapan.com/enurse/>

ある、と称しました。この発言は、老人ホームの高齢者や持病を持つ人たちの孤独感を慮るきっかけを国民たちにもたらし、外出しにくくなった高齢者たちを助ける動きが大学生らから広がる一方で、法律で認められている安楽死をめぐる議論が感染拡大によって再び活発化しているといいます。ドイツでは、予断を許さない異常な状況と先の見えない不安感のなかを生き抜くには、体の健康だけではなく、精神面での健康を保つことも大変重要だと伝えています。「一緒に乗り越えよう」「ありがとう」の言葉が増えたといわれるフランスでは、その後、介護施設が危機的状況に陥っているとの情報も伝わってきました。

世界中の人々が危機的状況の中、それぞれの考え・願い・

思いをもって動いています。21世紀に住む私たちは、新型コロナウイルスの発生によって、世界で何が起きているか、どんな警告が出されているかを、数値や映像を通して瞬時に知ることができます。どうすれば自分がウイルス感染を避けられ、また、万一、感染した際には、どうすれば他人に感染させないかも知ることができますが、それを守れるかどうかは本人の意識次第になります。とはいえ、外出の自粛等により、持病を持つ高齢者の不安は強く、家に閉じこもって身体を動かすこともできない。動けなくなった人たちが増えているのです。

在宅看護の組織を率いる私が検査開始の時期・検査対象の選択が遅すぎることに気づいたのは4月1日のことでした。介護保険制度による在宅サービスは多職種が交互に訪問して

おり、陽性者が訪問した場合はサービス利用者とその同居家族への感染の可能性も高く、互いに感染を拡げる要因にもなります。症状の有無にかかわらず検査を即時・定期的を実施することで、それぞれの意識・行動が強化され、大事な感染防止策となり得るはずです。そんな中で、在宅訪問先のナルさんの言葉が浮かんできました。「必要な看護を、必要な時、必要なだけ行ってほしいのです。必要以上にされたら、私たちはパニックになってしまいます。医療職も福祉職も、人の家に土足で踏み込んでくる。そんなことはやめてほしい。家庭というのは私たち家族一人ひとりが思いを込めてつくってきたものなのです。私たちの話しを黙ってきいてほしい。同じ目線で話してほしい。単なる技術者では困るんです」この言葉の中に、コロナ対策のヒントが潜んでいました。それぞれの家族が築いてきた家庭の中で繰り広げられる在宅看護には、人間としてその人がその人らしく生き抜くあたり前の生活スタイルを支えるという意味が含まれているのです。サービスがたくさんあるのは良いのですが、それが逆効果になるということもあるということです。サービスは自律意識をも組み入れ、最大の力が発揮できるものでなければいけません。

このような危機的状況の中で視点を変えると、わが国の昔ながらの暮らしぶりや一人ひとりの役割意識が蘇ります。そこにセルフケアの意識が加われば強固な仕組みができるかもしれないと思うのです。これからの時代は、「各自の意識変革とセルフケアへの挑戦」が必要と考えます。地域づくりは市区町村が地域の実情を様々な角度から把握・整理した上で、住民一人ひとりが主体的に取り組むようであればいけません。「私はこの度のコロナで災害対策同様の危機管理の実践トレーニングとなりました。急な物事に迅速かつタイムリーに対応する大切さとそのための関係者への発信の仕方や、論理的説明による診療規模の調整に持ち込むわざなど、何でもどんなことでも、実になるものなんだと実感しました。1番心



写真一：ロールプレイで事例を学ぶメッセンジャーナース

「メッセンジャーナース」とは、

医療の受け手が自分らしい生活を全うする治療・生き方を選択する際に、心理的内面の葛藤を認め、認識のズレを正す対話を重視する懸け橋となるナースのこと

配したのは、隔離病棟に指定した病棟のスタッフ達の反応でしたが、未知なものへの不安も多くあったはずなのに、文句も言わず、颯爽と引き受けてくれたことに、心底感謝でした。妊婦1名を他の病棟に一時移動させ、残った看護師長、スタッフで粛々と準備をし、その階にいた患者さんを他の2病棟に全員移動したことで、隔離以外の病棟も一気に患者が倍増し、大変だったと思いますが、みんな、いざとなれば、底力を発揮してくれるもんだなあ〜と、改めて感激しました。今回のコロナ騒動で、今までのイケイケ社会、自己中心社会の膿が一気に吹き出していくのだと思っています。自身も含め、こんな時こそ、倫理観をもった人間らしい誇りある行動ができるよう、心がけようと家族で話しています。そちらの事態が早く落ち着くようお願いしています」。北海道の病院の副院長の任務として地域づくりに取り組む同志から飛んできた言葉は、私の心に痛く響きました。

看護師のセカンドキャリアとしても期待されているのが2010年に発足したメッセンジャーナースの全国連携プロジェクトです（写真一：ロールプレイで事例を学ぶメッセンジャーナース）。その認定所持者は2020年3月末の時点で34都道府県140名に広がっております。リタイヤ組、大学学長や教授、副院長・看護部長、居宅事業者・起業家ナースもおります。皆、その役務を果たしながら新たな取組を切り拓き、

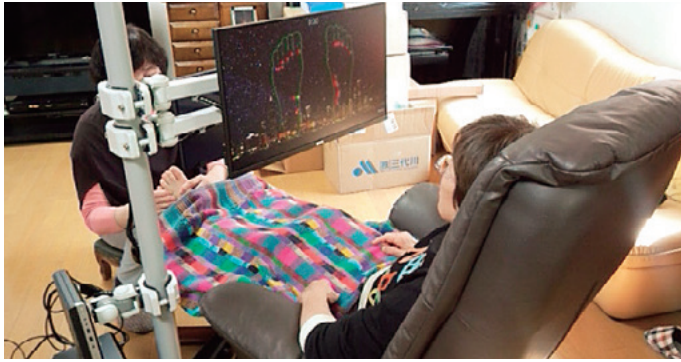


写真-2 :『フット・プラネタリウム』

「フット・プラネタリウム」とは、
「会話を避けたい。そんな時は言葉がなくても通じあう」対面式の非言語系
コミュニケーションツール

活動の礎を固めるべく動いています。それぞれの得意分野の力量を活用し合う一方、学識経験者として地域づくりにも参画、在宅での看取り対応体制の整備にも関わる地域特性を重視した繋ぐ活動への着手です。その本質は、情報を正しく得て、正しく伝えることで、医療の受け手と担い手双方の“主体性と安心”を基盤に、「聴ける」「必要な情報を提供する」「相手が情報を自分のこととして理解し、行動化できる」の3点を絶対条件とし、医療の受け手の傍らからサポートすることです。一人暮らしの高齢者が増え続け、生活することの意味・生きることの価値を改めて考えさせられることが多くなりました。また、今の時代、問題になっているのがストレスです。メンタル不調者は今後もさらに増加していくことが予測されます。そこで、メンタルヘルスの新しい選択肢として、考案・製作した対面式の非言語系コミュニケーションツール『フット・プラネタリウム』（写真-2：『フット・プラネタリウム』）導入により、真の意味で心に寄り添うシステムの実現です。会話の代わりにタッチパネルを通して、光と音で本音を伝える。リラックス効果もあり、介護している家族の気持ちをも癒すことがわかってきました。こころの風景を読みとる手技と非言語系コミュニケーションツールの融合は、自然治癒力の喚起向上に寄与し、メッセンジャーナースの活動にも組み込まれております。メッセンジャーナースに救いを求める人は患

者だけではなく、一般にも利用されつつあります。

新型コロナウイルスの感染が広がる中でも、スウェーデンでは学校やジム、カフェやレストランを閉鎖せず、政府が国民に責任ある行動を呼び掛け、他の人と一定の距離を保つ「ソーシャル・ディスタンス」に関する指針に従うよう求めているという情報もあります。福祉大国スウェーデンは、国民全体で支え合える自律した人々の集まりです。だからこそできる対応と受け止めます。そこには自分らしさを貫く医療・生き方に向き合い、「自主逝」^{注)}を貫くのが当然というこれまでの姿が伺えるからです。20数年前、病院でも施設でもご自宅でも、携わっている看護師それぞれが同様に発した「ひとりでは死なせない」という言葉が浮かんできます。新型コロナウイルス発生を機に、改めて看護師としてできることをより高めたいと日々考えております。その1つとして、メッセンジャーナース同志の力を合わせた創意工夫により、一人ひとりの自主性・主体性を引き出し、ケアに頼り過ぎず自らの意思で健康のセルフチェックやセルフメディケーションを継続実施できるような取り組みです。個人の自主性と主体性を引き出すことで自然治癒力と免疫力を活性化・強化しようとの考えです。健康な時からセルフケアについての意識向上を心掛け、各自が実施できるようにすることは、我が国の地域づくりを進める上で必要不可欠な事柄といえます。

注) 他者の指図ではなく、自分の意思で死と向き合い、最期まで自分で決めて行動しながら逝くこと。

*脱稿の時点で、わが国の発令された緊急事態宣言が解除されはしていたものの、世界中の新型コロナウイルス感染者は1,287.3万人、死者56.9万人（7月13日現在。厚生労働省発表）を超えました。この間考えさせられた国民性・地域住民意識の違い、「自己判断で感染防止をしないとなりません。母が高齢で、妻が病弱ですので人が集まるところは極力避けて生活しています」。そんな言葉を耳に、メッセンジャーナースによる全国各地の繋がりによる動きが、より重要になると確信しました。

緊急レポート

COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクト ～利用者を支えるチームへの感染防御資材供給を目指して～

COVID-19 在宅医療・介護現場支援プロジェクト

事務局 吉江 悟

(問合せ先：covid19hcjp@gmail.com)



○ プロジェクト概要

新型コロナウイルスの流行を受け、4月以降、訪問看護師はじめ在宅医療・介護の現場で働く専門職有志による「COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクト」を、日本訪問看護財団の多大な協力のもとで開始しました。在宅医療・介護の現場で、新型コロナウイルス感染者、濃厚接触者、感染疑いの方、入院治療後退院された方（陰性化したものの慎重な対応を要する方）などへの対応が必要となる場面に備えて、地域単位の資材・情報等の供給体制を整備したいと考えています。

4月に活動を開始したときにはまったく何もない状態でしたが、本稿を執筆している6月中旬時点で、日本財団・メットライフ生命から日本訪問看護財団に提供される資材購入等のための資金、クラウドファンディングサービス READYFOR の「新型コロナウイルス感染症：拡大防止活動基金」による有志への活動費用の助成という2つの財源が、幸いにして確保されました。今後、これらを主な財源として活動を本格化させていく予定です。詳しい内容、最新の情報については、表1のほか、下記のQRコードからウェブサイト (<https://covid19hc.info/>) にアクセスしてご覧いただければ幸いです。



COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクト
<https://covid19hc.info/>

表1 | COVID-19在宅医療・介護現場支援プロジェクトで
取組む内容(予定)

- ・在宅医療・介護の現場で感染者等（※）に対応できる感染防御資材を地域単位で配備する（N95マスク、サージカルマスク、手指消毒剤、プラスチックグローブ、プラスチックガウン、フェイスシールドなど）
- ・各地の訪問看護師等をコーディネーターとして連絡体制を整え、要介護者等の感染が判明した際に、迅速に資材と情報が在宅医療・介護チームのもとへ提供されることや、地域を超えた情報共有の実現を目指す
- ・在宅医療・介護チームを対象としたリーフレット等を作成し、感染防御資材の着脱手技をはじめとする感染予防策の標準化を促す
- ・上記活動はすべて、国による資材供給の動向などを見守りながら、最適な機能分担や相互補完がなされるよう可変性を保って実施していく

※ 新型コロナウイルス感染者、濃厚接触者、感染疑いの方、入院治療後退院された方（陰性化したものの慎重な対応を要する方）など

○ 本プロジェクトとオレンジクロス財団との関わり

本プロジェクトは大きく、在宅医療・介護に従事する有志メンバーと日本訪問看護財団という二者の協働によって展開されていますが、過去にオレンジクロス財団（以下、OCF）が実施したプロジェクトのご縁で今回の体制が実現されている面もあり、ご縁に深く感謝するとともに、その内容に少し触れておきます。

まず、OCF 設立当初に行われた「地域包括ケアステーション実証開発プロジェクト（以下、CIC）」の存在は、間接的に大きな影響を与えていると感じます。CIC には、日本訪問看護財団から佐藤美穂子常務理事が、全国訪問看護事業協会から高砂裕子常務理事がオブザーバー参加してくださっていました。今回のプロジェクトにおける日本訪問看護財団との協働、全国訪問看護事業協会による協力は、このときのご縁も1つのきっかけになっていると思います。

また、CIC で一緒した藤野泰平さん（みんなのかけつけ訪問看護ステーション名古屋）、古屋聡先生（山梨市立牧丘病院）という強力なお二人が、今回の有志メンバーに加わってくれています。有志メンバーに名前は入っていませんが、菅原由美さん（ナースケア）より全国のキャンパスのみなさまへ声がけをいただいております。今後の展開に向けて大きな助けとなっています。CIC を取材いただいた小池倫平さん（医学書院）も、リーフレット作成で大変なお力添えをいただいております。そして、CIC 代表世話人の堀田聰子さん（慶應義塾大学大学院）には、今回のプロジェクトにおいても、さまざまな智慧をいただいております。

今後、本プロジェクトを全国的に展開していく際には、CIC に参加された他のみなさまのお世話になることもあるかと思います。もしもこの記事をご覧になった CIC 同窓生の方（それ以外も含めて）で協力しても良いという方がおられましたら、ぜひ吉江ま

でご一報ください。

OCF との関わりはこれだけではありません。有志メンバーの中心者でもある長嶺由衣子さん（東京医科歯科大学）は、オレンジクロスの「日本版社会的処方あり方検討事業（仮題）」で一緒に経緯から参加に至っています。有志の中で看護系研究者のみなさまのとりまとめ役を担っている山本則子先生（東京大学大学院）は、OCF で行われた「ソーシャル・コミュニティ・ナーシング（SCN）研究委員会」の中心メンバーです。あらためて書き連ねてみると、かなり多層にわたる関わりがあると感じます。

○ 今後に向けて

去る6月13日に、感染者等に1週間対応できる想定で試行的に作成した「陽性者・濃厚接触要介護者等対応チーム感染防御パッケージ（仮）」100箱の準備が完了したところです（写真）。今後、日本財団・メットライフ生命の資金援助により、数千個単位でのパッケージ化が進んでいく予定です。まずはこの100個から、必要とする在宅医療・介護チームへ送付し、現場で活用していただきたいと思います。

吉江 悟

一般社団法人Neighborhood Care 代表理事

2002年東京大学医学部健康科学・看護学科卒。看護師、保健師。虎の門病院看護師、東京大学生命・医療倫理教育研究センター特任助教、同医学部在宅医療学拠点特任助教などを経て2015年に一般社団法人Neighborhood Careを設立、日本で初めてのビュートゾルフチームであるビュートゾルフ柏を開始。



「陽性者・濃厚接触要介護者等対応チーム感染防御パッケージ（仮）」の内容



有志メンバーにより梱包された100箱



一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける個人・法人の賛助会員を広く募集しています。

● 賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円 法人会員（1口）100,000円

● 期 間：毎年7月1日～翌年6月末日

● 賛助会員特典：① 各種情報提供
② 広報誌の配布
③ 各種セミナーの無料招待

● 申し込み方法：財団ホームページ『賛助会員について』から
申込書をダウンロードしていただき、FAXにてお申込みください
<https://www.orangecross.or.jp>

(アイウエオ順)

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	https://www.cosmos-group.co.jp/care
株式会社ツクイ	https://www.tsukui.net
株式会社デベロ	http://www.develo-group.co.jp
株式会社福祉の里	https://www.fukushinosato.co.jp/
株式会社やさしい手	http://www.yasashiite.com
公益財団法人 星総合病院	http://www.hoshipital.jp
社会福祉法人 伸こう福祉会	https://www.shinkoufukushikai.com/
社会福祉法人 新生会	https://www.sun-village.jp/
日本生活協同組合連合会	——

(2020年6月現在)



一般財団法人オレンジクロス 2020年度セミナー等のご案内

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当面の間、オレンジクロスセミナーを中止します。
再開にあたっては、当財団ホームページ (<https://www.orangecross.or.jp>) にてご案内します。



広報誌 オレンジクロス | 夏号 2020 SUMMER VOL.09 | 2020年8月1日発行

発行：一般財団法人オレンジクロス

〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216

<https://www.orangecross.or.jp/>



本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」を採用した環境にやさしい印刷物です。